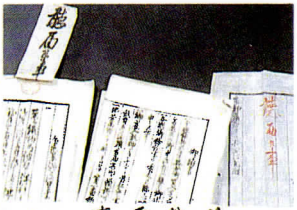
西陣明治の群像⑲

理論家　植田利七

古来から西陣の織屋は糸商と仲買業者のあいだに位置し、いわば川上と川下の資力によって支配されてきたといえる。そのため京都府の後援で明治初に設立された西陣物産会社も、まず最初に仲買業者との取引改善に着手し、これは明治期を通じての重要なテーマであった。それと同時にジャカードの導入などに見受けられるように生産技術の向上にも着眼し、織屋自身の体質改善にも努力がつづけられていた。

だが竹内作兵衛に代表されるように有力な指導者がいた明治初期はまだしも、明治十四年に西陣織物会所が事実上その機能を停止してからは、ほとんど無組織状態になり、再び結束の固い仲買業者の搾取に甘んじなければならなかった。

明治十四年から十九年まで西陣を襲った不況のなかで、転換期の産地を冷静にみつめていた一人の機業家がいる。『大日本織物協会報告』に「わが邦織物器械の改良を望む」という一文を発表した植田利七である。



植田はその稿のなかで、終始「……事物の改良は施すに容易ならざる事業を後にし、その為し易きものより先にするの得策なる事を悟れり。これ予が諸君に向って織機の改良を望む所以なり」とのべ、国産化が急速にすすむジャカードの使用を訴えている。その根拠として、明治初より仲買業者に対抗して織屋の営業組織の確立ばかりが主張されてきたが、長年の取引慣習を変革することは、商取引や交渉事にはうとい職人肌の機業家には無理があることを挙げている。

それよりもむしろ織屋は織屋に徹して、「メカニック」（ジャカードのこと）を導入し、織物生産の技術を高めるほうが、生産者としては重要だというのである。

いつの世も技術革新とコストダウンこそがメーカーの生き残る道である。ジャカードによる機織の改良と生産性向上に着眼した植田の論旨は、当を得たものであるといわねばならない。

（福本武久）